あまいめまい

unplugged

　前日にウソップと一緒に船を修理した疲れが溜まっていたのか、チョッパーが目を覚ました時にはハンモックの上で眠っている男は一人もいなかった。寝惚けまなこで目をこすり、男部屋の壁に取り付けてある時計を見ると、すでに短針は11時を過ぎたところにある。
　寝過ごしたことに気づいて、急いで帽子をかぶり男部屋を出ると、チョッパーは人の姿を探した。みんなどうして起こさなかったんだろ、と息を弾ませながら思うと、誰もいない甲板を見渡し、不思議に思いながらまずキッチンから探していこうと階段をあがった。その時ようやく港に船が泊まっていることに気づいて、小さな不安がチョッパーを駆り立てる。
　みんな街に行っちゃったのかな。
　寂しさがチョッパーの胸にわき起こり、それでも仲間を捜そうとキッチンのドアをゆっくりと開けた。

　するとそこには、航海術の本を広げながら海図を書いているナミの姿があった。髪をゴムで束ねて、シンプルながらもナミにとてもよく似合う眼鏡をしている。ドアが開いて光が差し込んできたことに気づくと、ナミは優しく笑ってチョッパーに話しかけた。
「おはよう、お寝坊さん」
　ペンを置いて身体をチョッパーの方へ向ける。照れくさそうにチョッパーは頭を掻くと、他のクルーがいないことを思いだし、ナミに尋ねた。
「みんなはどこ行ったんだ？」
「今買い出しに行ってるのよ、もうそろそろ帰ってくると思うわ」
　そう言うとナミはゆっくりと立ち上がって、冷蔵庫の中身を確認しはじめた。
「疲れてるだろうから寝かせておいたんだけど」
　みんな優しいなぁ、と温かい気持ちになると、チョッパーは誰も座っていない席へちょこんと腰を下ろした。その時おなかから音程の狂った音が鳴り、ようやく腹が空いていることに気づいた。その音にナミが反応し、チョッパーの方を振り向く。
　目が合い、チョッパーは気恥ずかしくなってその音を止めようと手でおなかを押さえつけた。またナミは小さく笑う。
「チョッパーの朝御飯ルフィが食べちゃったのよ。簡単なものなら作れるけど、
　それでいいでしょ？」
　卵と牛乳、バニラビーンズと食パンを台所の上へ置くと、ナミは振り向きながら尋ねた。チョッパーが恥ずかしそうにありがとうと言うと、調理器具を扱いながらどういたしまして、という答えが返ってきた。

　ものの数分も経たないうちに、チョッパーの前に簡易な朝御飯が並べられた。バニラビーンズの甘い香りがやわらかく嗅覚を刺激し、適度に焼けた食パンが食欲を駆り立てる。それはナミ特製のフレンチトーストだった。
　いただきます、と食前の挨拶をすると、早速チョッパーはまだ熱くてこうばしいパンにかじりついた。やわらかく甘い匂いが口いっぱいに広がる。
「美味しい？」
　パンの熱さも気にせず無我夢中でかじりつくチョッパーにナミは尋ねた。
「すっごくうまいぞ」
　その答えに満足すると、ナミは自分の前に置いてあるコップを手に取り、ゆっくりと紅茶をすすった。遅い朝食をとりながら、チョッパーはその動作を見つめる。
　ナミは綺麗だなぁ、とぼんやりと思った。

「遅いわねサンジ君たち」
　遠目で窓の外を眺めながら、ナミは一言放った。窓からやわらかい日の光がキッチンへ射し込んで、部屋をほのかに暖めていく。
「まぁ騒がしくなくて良いけどね」
「いっぱい買い込んでるのかな」
「そうね、船長があの大食漢だからね」
　そう言うとナミは頬杖をついて男達の帰りを待つように窓を見つめ続けた。間接的な日光を背景にして、オレンジ色の髪の毛がやわくきらめく。

　その時、垂れた前髪からわずかに見えるナミの瞳を、チョッパーは見逃さなかった。
　とても痛々しく悲しい瞳だった。
　チョッパーは、ルフィの話をしている時のナミの表情に、一人だけ気づいていた。まるで言葉を失って絶望の中にいる人魚姫のような、静かな慟哭。それは普段の会話の中では滅多に見られないものの、時折チョッパーの目に映って心に強くひっかかった。
　けれど、決してその全てが悲しみの色で覆われているわけではなく、むしろ儚く美しく思えた。甘いまどろみさえ感じる。
　他のクルーはナミのその表情に気づいているんだろうか、という疑問を持ち、ルフィ以外の人間に尋ねようかとも思ったが、何となくそれは気が引けた。
　なぜかはわからないけど。

　チョッパーの胸に秘めるその小さな疑問は、キッチンに二人しかいないという状況も相まって、どんどんと膨らみとうとう口をついた。
「なぁ、ナミはルフィのこと嫌いなのか？」

　ナミは頬杖をつきながらチョッパーの方へ振り向き、意外そうな目で見つめる。
「どうして？」
　するとチョッパーは、恐るべき純粋さでナミの核心に触れた。
「だって、時々つらそうな顔をしてるから」

　その一言に、ナミの表情は一瞬固くなった。
　あ、まずい。

　表情から悟ってチョッパーがうろたえる前に、すぐにナミはいつもの優しい笑顔を作りながら皮肉めいたことを言った。
「そりゃつらいわよ、あんなわがままな船長」
　口の端を片方だけ上げて、ナミは悪そうな笑顔をしてみせた。いつものナミの様子にチョッパーはほっと胸をなで下ろしたが、もうこの話題に触れるのはよそう、と場の雰囲気を感じてその疑問をしまった。
　いたたまれなくなり再びフレンチトーストを口に運ぶと、ナミの視線を帽子に感じながら、なるべくその顔を見ないように努める。
「でも、別に嫌いじゃないわよ」
　再びナミは窓の方へ顔を向けて、おぼろげに外を見つめながら呟くように言った。
　チョッパーはわからない。
　嫌いじゃないのに、どうしてそんな悲しそうな顔をするんだろう。

　すると、外から聞き慣れた声が段々と近づいて大きくなっていくのに気づいた。両手に食材を持っているせいか、男達は二、三度ドアを開けるのに失敗して、床にいったん紙袋を置く。ようやくドアが開くと、そこにはサンジとルフィ、ウソップの姿があった。
「おうチョッパー、起きてたのか」
　ヘビースモーカーの男がそう言いながら中に入ると、空いているテーブルのスペースに両手の食材を静かに置いた。サンジに続いてルフィとウソップもキッチンへ入ると、チョッパーがほおばっているフレンチトーストに誰よりも早くルフィが反応した。
　荷物を床にどさっと置き、羨ましそうにチョッパーの横へやってくる。
「チョッパー、一人でうまそうなもの食ってんなぁ」
　食べ物を前にすると舌を出して暗に要求するのが彼のくせだ。
　そんなルフィの行動を察して、ナミが命令にも近い注意をはなった。
「ダメよチョッパーの朝御飯なんだから。もうすぐお昼だからあんたは待ちなさい」
　ナミにとがめられてルフィが口をとがらすと、その光景を眺めながらウソップは意外そうにチョッパーに尋ねた。

「へぇ、チョッパー、おまえそれ自分で作ったのか」
「う、ううん、ナミが作ってくれたんだ」
　その一言に男軍団は全員奇声を発して驚いた。
　どんな法外な値段を請求されたんだ、など散々なことを男達に言われると、ナミはルフィとウソップをこぶし一発で黙らせた。唯一殴られなかったサンジは、どうして俺には作ってくれないのナミさ～ん、としくしく泣きながら呟く。

「特別よ。チョッパーは特別」
　そう言うとナミは手を伸ばして、からかうようにチョッパーの頬を短く優しく撫でた。とても照れくさくなってチョッパーは帽子のつばを掴んで顔を隠すように深くかぶる。
　すると、正気に戻ったルフィは歯を見せて満面の笑みをしながらナミに言った。
「おまえすげぇな、今度食わせてくれよ」
　さきほどと同じように口の端を片方だけ上げて、意地悪そうにナミは笑う。
「有料なら作ってあげるわよ」
　そのあくどい笑顔の中に、一瞬だけあの悲しい表情が混ざったのをチョッパーだけは見逃さなかった。
　甘く儚い、美しい悲愴にも似た表情を。

「チョッパーありがたく食えよ」
　サンジが恨めしそうに見つめながらそう言うと、チョッパーは怯えながらゆっくりとフレンチトーストの残りを口に入れた。かなり時間が経ったものの、まだほのかに温かい。

　その時、チョッパーは口の中に異物を感じて、一瞬身体をふるわせた。
舌の上でごろごろとしていて、噛むと泡のように消えてなくなる。
　それは、溶けきっていない砂糖の塊だった。
　唾液と混ざるとそれは一瞬にしてなくなり、バニラビーンズの優しい香りも相まって強烈な甘さがチョッパーの口いっぱいに広がる。

　甘い、なんて、甘いんだろう。

　ナミの美しいあの表情を思い出しながら、甘くゆるいめまいがチョッパーを襲った。

-FIN-